

國學院大學學術情報リポジトリ

『日本音義』の仮名遣い：
荷田春満が契沖の学説を受容したのはいつごろか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): 荷田春満, 契沖仮名遣い, 定家仮名遣い, 歴史的仮名遣い, 国学 キーワード (En): 作成者: 中村, 明裕, Nakamura, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000398

『日本音義』の仮名遣い

——荷田春満が契沖の学説を受容したのはいつごろか——

中村明裕

1. はじめに

本稿の目的は次の二点である。一つ目は、荷田春満（1669-1736）らが編纂したとみられる語彙集である『日本音義』における万葉仮名の仮名遣いと、契沖仮名遣いおよび定家仮名遣いとの関係を明らかにすることである（第2節）。二つ目は、これに基づいて春満が契沖（1640-1701）の学説を受容した時期の下限を明らかにすることである（第3節）。

『日本音義』の仮名遣いを調査した結果、定家仮名遣いと契沖仮名遣いの折衷というべき仮名遣いが用いられていることが分かった。『日本音義』においては、契沖仮名遣いで「お」と表記される語はおおむね「於」と表記される。契沖仮名遣いで「を」と表記される語は、定家仮名遣いでも「を」であればおおむね「遠」で表記され、定家仮名遣いで「お」であればおおむね「乎」と表記される。これは、それまで定家仮名遣いに近い仮名遣いを採っていた春満が、契沖の仮名遣い説に触れ、定家仮名遣いと契沖仮名遣いとの折衷を企図したものと考えられる。

春満が契沖の学説を受容した時期がいつであるかは従来問題とされてきたが、これによりかなり狭く限定することができる。『日本音義』は宝永5年9月1日に起筆されたものである。『日本音義』に契沖の仮名遣い説の影響がみられることから、春満が契沖の学説を受容した時期の下限を、宝永5年9月1日に設けることができる。松本久史（2005、pp. 32-35）が指摘するように、宝永5年2月13日の時点では春満はまだ定家仮名遣いに近い表記法を用いており、春満はこの間に契沖の仮名遣い説を受容したものと考えられる。

2. 『日本音義』の仮名遣い

本節では、『日本音義』で用いられている万葉仮名の仮名遣いについて検討する。第2.1節では『日本音義』の概要を述べ、第2.2節以降は、その全体、/オ/の仮名、

/オ/以外の仮名、仮名遣いに変更された語、に分けて『日本音義』の仮名遣いについて論じる。

2.1. 『日本音義』について

『日本音義』は荷田春満らが編纂したとみられる語彙集である。日本語の語彙にアクセントおよび語釈が付されたもので、漢文で記されている。

本稿で調査対象にするのは以下の3点である⁽¹⁾。(1)と(3)は『新編 荷田春満全集 第11巻 語彙・アクセント資料』(2009、以下『全集』)に収められているのでこれを用い、必要に応じて実物を参照した。(2)は実物に当たって調査した。

(1) A-1-2-231 [1153] - 1 (「語彙集断簡 天部」の題で『全集』 pp. 113-122所収)

(2) A-1-2-231 [1153] - 2 (『全集』未収)

(3) A-1-2-214 [126] (「日本音義」の題で『全集』 pp. 139-171所収)

いずれも東丸神社あずましろ(京都市伏見区)所蔵の東羽倉家文書に含まれる。Aから始まる番号は『近世国学の展開と荷田春満の史料的研究』による東羽倉家文書の目録番号、亀甲括弧内は文書番号である。ただし、枝番は今加えた。

『全集』においては(3)の「言語部」のみが『日本音義』として認められているが、判型や書式が一致し、内容上一続きであることから、(1)(2)も『日本音義』の一部と認められる。(1)～(3)は春満が完成時に意図していたと思われる順序であり、また、現存の本文の成立の順序でもある。(1)は残存する「天部」の前半であり、(2)は天部の後半・歳時門・地部から衣服部までの全部・言語部の一部であり、(3)は残存する「言語部」のほぼ全部(アからウまで)である。

「天部」の冒頭には「宝永五年戊子九月朔起筆」とあり、言語部は正徳二年の「十二月十一日」で終わっている。したがって宝永5年9月1日(1708年10月14日)から正徳2年12月11日(1713年1月7日)にかけて編纂されたものと分かる。その途中にも日付の表示があるため、成立の過程が逐一分かる。

現存の『日本音義』は草稿段階と思われるものである。全体的に虫損や破損があるが、特に(2)の最後の部分は破損が甚だしい。筆跡から、おそらく春満ともう一人の人物が協力して編纂したのであろうと推測される。(3)「言語部」の冒頭には春満自筆とみられる部分があるが、大部分は別人の筆である(諸星美智直2009, p. 453)。春満自筆以外の部分はすべて同筆とみられるが、筆者は未詳である。

(2)は、(a)天部の後半、歳時門の一部、地部から衣服部までと、(b)天部および言語部の一部、歳時門のほぼ全部の2冊に分かれて保管されている。

2.2. 全体

初めに、『日本音義』の仮名遣い全体の傾向を見ておく。表1は、『日本音義』

中の問題の仮名を、契沖仮名遣い・定家仮名遣いと比較したものである。『日本音義』の見出し語のうち、中近世以降の発音で、/イ、エ、オ/を含むものと、語頭以外に/ワ、ウ/を含むものを対象とした。

「音」の欄は中近世以降の発音である。『日本音義』の欄はその音にそれぞれの万葉仮名が何回用いられているかを表す。「契沖仮名遣い」「定家仮名遣い」の欄は、『日本音義』の仮名遣いがそれらと何例一致しているかを表す。『日本音義』の欄において、たとえば「伊(い)」の段は、『日本音義』の「伊」を「い」とみなしたという意味で、契沖仮名遣いや定家仮名遣いで「い」であれば「一致」とした。ただし、「乎」は、契沖仮名遣いで「を」、定家仮名遣いで「お」のときに一致とみなして集計した。これについては第2.3節で詳しく述べる。

表1の「計」の欄を見ると、『日本音義』の仮名遣いはおおむね契沖仮名遣いとも定家仮名遣いとも一致することが多いことが分かる。一致する割合は少し契

表1. 『日本音義』・契沖仮名遣い・定家仮名遣いの比較

音	『日本音義』		契沖仮名遣い			定家仮名遣い		
			一致	不一致	無し	一致	不一致	無し
イ	伊(い)	176	141	1	34	97	0	79
	比(ひ)	34	26	1	8	27	7	7
	韋(ゐ)	9	8	0	1	6	0	3
	為(ゐ)	1	1	0	0	0	0	1
ウ	宇(う)	12	6	0	6	3	1	8
	不(ふ)	45	25	0	20	21	0	24
	布(ふ)	1	1	0	0	0	0	1
エ	延(え)	14	9	2	3	5	3	7
	辺(へ)	18	14	0	4	12	0	6
	恵(ゑ)	2	1	1	0	0	2	0
オ	於(お)	14	11	1	2	8	5	4
	不(ふ)	3	3	0	0	2	2	1
	保(ほ)	18	14	2	3	12	0	6
	乎(を・お)	9	9	0	0	9	2	0
	遠(を)	7	5	0	2	5	3	1
ワ	半(は)	40	35	0	5	26	0	14
	播(は)	7	5	0	2	5	0	2
	和(わ)	10	3	7	2	1	4	5
計		420	317	15	92	239	29	169

沖仮名遣いが高いようである。ただし、定家仮名遣いには表記に揺れのある語があるなど資料上の問題もあるため、一概に言うことはできない。

なお、以下、表1について若干の補足しておく。

契沖仮名遣いについては、『契沖全集 第十卷』所収の『和字正濫鈔』『和字正濫通妨抄』『和字正濫要略』を調査対象とする。検索には『契沖全集』所収の索引を用いた。定家仮名遣いの代表としては、『国語学大系 仮名遣一』所収の『仮名文字遣』(天文二十一年本)を用いた。

『日本音義』中の一つの見出し語に問題となる部分が複数個所ある場合はそれぞれ別に数える。『日本音義』は推敲の跡がおびただしいが、修正後のものを採った。

契沖の仮名遣い書や『仮名文字遣』で複数の仮名遣いが認められているものは、「一致」と「不一致」に重複して算入してある。そのため、「契沖仮名遣い」「定家仮名遣い」の欄の合計は『日本音義』の欄の合計より多くなる。

一致の基準は広めに取ってある。たとえば、「阿末乃加播」の如きものも、『仮名文字遣』に「おほかはのへ」(21, 43)などがあれば一致とみなした。ただし、同じ行の異なる仮名を活用に基づいて一致とはしなかった。たとえば契沖の『和字正濫通妨抄』の「うたひ」(通522)を「宇多不」(169)との一致とはせず、「無し」に算入してある。一致・不一致の認定にはその他種々の問題があり、認定に迷うものもある。

[o]か[wo]かといった具体的な音声はここでは問題にしない。四つ仮名については本稿では検討対象にしないこととする⁽²⁾。四つ仮名は『仮名文字遣』の時代にはまだ混同されていないため挙例が少なく、比較しにくいためである。

なお、表中、「伊」の例が極端に多いが、『日本音義』の「言語部」は「阿部」「伊部」「宇部」のみが現存していることが主な要因である。

2.3. /オ/の仮名

2.3.1. /オ/の仮名の概要

以下、/オ/の仮名遣いについて述べる。/オ/は定家仮名遣いではアクセントに基づく仮名の使い分けがなされたため(大野晋1950:2006)、歴史的仮名遣いとの違いがもっとも大きい。そのため、『日本音義』の仮名遣いを考えるうえで重要である。

『日本音義』において/オ/には、「於」「遠」「乎」の三種(語頭以外では「保」「不」も)が用いられている。結論を先に言えば、『日本音義』では、契沖仮名遣いで「お」と表記されるものは定家仮名遣いに関わらずおおむね「於」と表記される。契沖仮名遣いでも定家仮名遣いでも「を」と表記されるものはおおむね「遠」と表記される。契沖仮名遣いで「を」と表記され、定家仮名遣いで「お」と表記されるものは、おおむね「乎」と表記される。

2.3.2. 「於」

表2は『日本音義』で「於」が使われている語を一覧にし、契沖仮名遣い・定

家仮名遣いと比較したものである。表2を見ると、「於」が使われている語は、契沖仮名遣いではおおむね「お」であることが分かる。契沖の仮名遣い書に現れない語を除けば、例外となるのは「伊散於泗」のみである。また、「伊散於泗」「於比加世」(および、『仮名文字遣』で「ひたちをひの時はを也」(21)とされる「帯」)以外は定家仮名遣いでも「お」になっている。なお、『日本音義』中、定家仮名遣いで「を」で契沖仮名遣いで「お」となる語は「追風」の1語のみである。

なお、表2以下の表等において、『日本音義』の欄の丸括弧は、数字のみのものは『全集』内のページ数である。a・bから始まるものは『全集』未収部分であり、a・bは第2.1節で述べたいずれの冊であるかを表し、数字は丁数を表す。「契沖仮名遣い」の欄の数字は『契沖全集』におけるページ数を表し、「正」は『和

表2. 『日本音義』で「於」の語

語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
山嵐	也末於呂之 (b10)	やまおろし (通533・通556)	山おろしの嵐(20) △み山をろし(20)
朧月	於保呂通幾 (b8)	△おほろ (通533)	△おほろ月夜(42) おほろの清水(21)
息嘯の風	於幾曾乃加世 (b8)	-	-
追風	於比加世 (b8)	おひかせ (通442)	をひ風 (17) をひ かせ (33) △をふ・ をひて (18)
(風の名)	於之也奈 (b8)	-	-
沖	於幾 (a27)	おき (正189)	おきつなみ (21)
晩稲	於久底 (a27)	おくて (正188・通540・略714)	おくて (21)
白粉	於之呂伊 (a34)	おしろい (通544)	-
倭文織	之図於利 (a43)	之頭於利 (正195補・略709)	-
落ち栗色	於知久利伊呂 (a45)	△おつ (正186) 加美於豆 (正194補)	△おち葉 (21) お ちふる (22) おつ (22)
石の帯	伊之乃於比 (a53)	おひ (正191・通543・略714) か はのおひ (正194) △うは、らおひ (正 194) 沼能於比 (正194補) はらお ひ (正193) ひきおび (正195)	おひ (21) △ひた ちをひ (21)
革の帯	加半乃於比 (a53)	々	々
唐組帯	加良久美於比 (a53)	△おひ (正191・通543・略714) か はのおひ (正194) うは、らおひ (正 194) 沼能於比 (正194補) はらお ひ (正193) ひきおび (正195)	△おひ (21) ひた ちをひ (21)
勲し	伊散於泗 (158)	いさをし (正144)	△いさをし人(18)

字正濫鈔』、「通」は『和字正濫通妨抄』、「略」は『和字正濫要略』の意である。「補」は契沖自筆の書き入れの意である。「定家仮名遣い」の欄の丸括弧内の数字は『国語学大系』におけるページ数を表す。△記号以降は、単語単位で語形が同一ではないものである。たとえば「をとこ」を「ささらえをとこ」に援用するといった類のものがこれである。契沖の仮名遣い書には、たとえば「追風」の項に「於を用」(通442)のように説明してあるものもあるが、表中ではこれらも「おひかせ」のような語形で収めた。

2.3.3. 「遠」

表3は『日本音義』で「遠」が使われている語の一覧である。表3を見ると、「遠」が使われている語は、契沖仮名遣いでも定家仮名遣いでもおおむね「を」であることが分かる。「伊徒遠泗幾」は契沖仮名遣いで「を」、定家仮名遣いで「お」であるから、「乎」とありそうなところであり、例外である。また、「折」や「青

表3. 『日本音義』で「遠」の語

語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
折	遠利 (b5)	△つゝらをり (正178) ひをりのひ (正180・通653) よをり (正178) をりはへて (通547) をりひつ (通544) をりふし (正173・通550) をる (正173・通545・略703) しをり (正180・通639・略707) しをる (正180・略707) たをる (通545・通481)	△雪の下をれ (17) 木のえたをれ (17) 花をたをる (17) しをりするみち (17) つつらをり (17) 花をおる (21) おりふし (22) 左近のむまはのひおりの日 (22) しゐておる (40)
陽	遠 (a38)	を (正171)	-
青摺り	阿遠須利 (a41)	△あを (正179) あをうみはら (正179) あをかひ (通606) あをかへる (正217) あをさは (正179) あをたか (通559・通601) あをつゝら (正271) あをと (正179) あをな (正179) あをのり (正179・通603) あをはか (通598) あをほと (通600) あをはのやま (通598) あをひえ (正207・通606) あをひとくさ (通600) あをみ (正179・通597・通611) あをむし (正179・通638) あをむま (通607)	△あをのり (17) あをかつら (17) あをつゝら (17) あをやき (17) あをによしなら (17) あをさは (19) あおな (21) あおはのやま (21) あおのり (21) あおと (22) せいそくとあおやかなり (23) あおし (23) あをし (23) あをうなはら (46)
小忌衣	遠美己呂毛 (a50)	-	△をみの衣 (19)
小忌	遠美 (a50)	-	をみの衣 (19)
冠の緒	加牟利乃遠 (a52)	を (正171)	たまのを (17) ことのを (17) はこのを (17)
愛しき	伊徒遠泗幾 (163)	△いとをしがる (正137)	いとおし (22)

摺り」は定家仮名遣いに揺れがある語であるから「乎」とあってもよさそうであるが、例外というほどではないであろう。

なお、「愛ほし」は歴史的仮名遣いでは「いとほし」であるが、契沖も「いとをしがる」(正137)としている。これは「いと惜し」という語構成と捉えたもので、『日本音義』では「伊徒者痛〔伊多美〕之下略而多徒音堅通也。遠洵幾者愛也。」と説明している。

2.3.4. 「乎」

表4は『日本音義』で「乎」が使われている語の一覧である。表4を見ると、「乎」が使われている語はおおむね契沖仮名遣いでは「を」、定家仮名遣いでは「お」であることが分かる。例外は「美乎通久之」であるが、「滯」は定家仮名遣いで「みお」であり、これとの関連で「乎」としたものとみられる。

なお、「滯」は「美遠」から「美乎」に訂正されている。初め契沖仮名遣いに従って「遠」としていたところ、定家仮名遣いで「お」であったために「乎」としたのかと思われる。なお、「加通良乎徒古」は、「加都良鳥等狐」から訂正されている。はじめ「鳥」を使っていたが、「乎」に統一したもののようである。類似の例として、風の名の「オシャナ」がある。初め「鳥志也奈」であったものを「乎之也奈」と修正し、その項目(119)を削除して、新たに「於之也奈」(b8)の見出しを立てている。「鳥」を「乎」に統一してから、「於」に修正したという流

表4. 『日本音義』で「乎」の語

語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
桂男	加通良乎徒古 (120)	△をとこ (正172・通538・略702)をとこやま(通537)さゝらえをとこ (正207)	△おとこ (23)
細愛男	草々良延乎徒古 (b14)	さゝらえをとこ (正207) △をとこ (正172・通538・略702)をとこやま (通537)	〃
月人男	通幾比徒乎徒古 (a2)	△をとこ (正172・通538・略702)をとこやま(通537)さゝらえをとこ (正207)	〃
月読男	通幾与美乎徒古 (a2)	〃	〃
一昨日	乎徒通比 (b5)	△をとゝひ (正172)	△おとゝひ (23・33)
一昨日	乎徒々比 (b5)	をとゝひ (正172)	おとゝひ (23・33)
一昨年	乎徒徒之 (b5)	をとゝし (正172)	おとゝし (23)
滯	美乎 (a23)	みを(通626)△みをつくし(正180・通628・略707)	雲のみお (20) △みをつくし (17)
滯標	美乎通久之 (a23)	みをつくし (正180・通628・略707) △みを (通626)	みをつくし (17) △雲のみお (20)

れであろう。

2.3.5. 「不」「保」

『日本音義』において「不」「保」と表記される/オ/は、おおむね契沖仮名遣いでも定家仮名遣いでも「ふ」「ほ」である(表1)。

『日本音義』において/オ/が「不」で表記されるものは「阿不久」(扇ぐ、148)、「阿不久」(仰ぐ、同)、「阿不孖久」(同)の3例である。「扇ぐ」「仰ぐ」は契沖仮名遣いと一致する。『仮名文字遣』には「あをくあふく 仰 扇」(18)とあり、解釈の余地があるところだが、どちらの語も両様が許されるという意味とみて集計した。「孖」は不明であるが、字形からして「襴」の譌字かと思われ、「あふねく」の語形を表すものか。「あふねく」が「仰のく」の異形であるとすれば、契沖仮名遣い(正261)および歴史的仮名遣いに一致する。

『日本音義』で「保」であるものは、おおむね契沖仮名遣いでも定家仮名遣いでも「ほ」であるが、例外は二つある。一つは「陽炎」である。『日本音義』では「加気呂保」(121)、契沖仮名遣いおよび歴史的仮名遣いでは「かけろふ」(正247・正274)である。『仮名文字遣』には、語源上は同じであるものの、「蜻蛉」の「かけろふ」(49)はあるが、「陽炎」はない。もう一つは「頃ほひ」である。『日本音義』では歴史的仮名遣いどおり「古呂保比」(b2)であり、『和字正濫鈔』は「ころほひ」(正198)の他に「あくるころをひ」(同)を立項している。定家仮名遣いでは「ころほひ」(33)および「ころほい」(42)である。

2.3.6. /オ/の仮名の小結

以上のように、『日本音義』の仮名遣いは契沖仮名遣いと定家仮名遣いの折衷のような形になっている。契沖の仮名遣い説に触れ、定家仮名遣いと契沖仮名遣いの折衷を企図したものかと思われる。すなわち、契沖仮名遣いで「を」、定家仮名遣いで「お」という齟齬があったときに、「乎」を使ったと考えられるのである。このことは、契沖の仮名遣い説の影響を受けていたことを示すとともに、定家仮名遣いを完全に放棄するには至っていなかったことを示唆する。

この場合に「乎」が選ばれた理由は明確ではない。小松英雄(1974:1998)によれば、定家による書写において、「越」「乎」を字母とする仮名は、「お」「を」の対立が中和されたことを表す仮名として用いられているという。また、坂本清恵(2008)によれば、東山御文庫本『僻案抄』(定家自筆本の双鉤填墨本)では、「乎」を字母とする仮名は「を」ではなく「お」と通じて低いアクセントの拍を表わす仮名として用いられている。もしかするとこうした定家の表記法の影響があるのかもしれない⁽³⁾。

2.4. /オ/以外の仮名

本節では/オ/以外の仮名について述べる。/オ/以外については、そもそも契沖仮名遣いと定家仮名遣いとの間に異なりが少ない(大野1950:2006, pp. 255-256)。『日本音義』の仮名遣いもおおむね契沖仮名遣い、定家仮名遣いの両者と

合致するようである(表1)。以下、『日本音義』と契沖仮名遣いや定家仮名遣いとの間に不一致が見られる語を指摘しておく。

2.4.1. 契沖仮名遣い・定家仮名遣い両方と不一致

まず、表5は契沖仮名遣い・定家仮名遣いの両方と不一致がみられるものである。

「葡萄染め」「喘ぐ」「衣替へ」「俄か」は、契沖仮名遣い・定家仮名遣いの両方、更に歴史的仮名遣いも「えび(ぞめ)」「あへく」「(ころも)がへ」「にはか」であり、『日本音義』のみ異例である。

一方、「慌たたし」「泡雪」「泡」は歴史的仮名遣いでは「あわたたし」「あわゆき」「あわ」であり、『日本音義』の方が歴史的仮名遣いと合致する。契沖は「あわ」「あは」の両様を認めている。契沖は、『和字正濫鈔』では『万葉集』巻2・203番歌の「降る雪は安幡雨な降りそ」に基づいて「沫 あは〔万葉第二〕」(正230)としている。『和字正濫通妨抄』では「あわともあはとも書へき歟」(通596)、『和字正濫要略』では「あわ」を見出しとして「あはとも通して書へき也」(略729)としている。春満が「わ」のみを認める意図だったか両様を認める意図だったかは定かでないにせよ、選んでいるのは「わ」の方である。なお、後に春満は『伊勢物語童子問』の中で「淡の字の訓はあは也。沫の字泡の字の訓はあわなり。かなも違へり。近世古語をしらず、かなをもしらざる輩、沫雪を淡雪とかけり。」(『荷田全集』第壺巻 p. 393)と述べており、「泡雪」であって「淡雪」でなく、仮名遣いも「あわ」である旨を明示的に述べている。

「阿和多々泗」についても、『日本音義』が独自に歴史的仮名遣いに到達している。第2.4.2節および第2.5節でも触れる「慌つ」も同様である。これらの語の仮名遣いについては、春満は契沖よりも一歩先を行っていたことになる。

表5. 契沖仮名遣い・定家仮名遣いの両方と不一致

音	語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
エ	葡萄染め	恵比曾每 (a46)	△えひ (正204)	△えひかつら (25)
エ	喘ぐ	阿延久 (149)	△あへき (正217)	あへく (29) △あへき (29)
エ	衣替へ	古呂毛加延 (b2)	△かへ (通468)	△かへ (29)
ワ	慌たたし	阿和多々泗 (155)	あはたゝし (正230)	あはたゝし (45)
ワ	俄か	仁和加 (156)	にはか (正223)	にはかなり (45)
ワ	泡雪・淡雪	阿和勇幾 (117)	あわゆき (正221、通596、略729) あはゆき (正221、通596)	あは雪 (44)
ワ	泡	阿和 (a28)	あわ (略729) あは (正230、通596、略729)	あは (44)

表 6. 契沖仮名遣いと不一致

音	語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
イ	潮騒	之保散伊 (a29)	しほさゐ (正154)	-
ワ	水泡	美奈和 (a30)	みなは (通627)	-
ワ	慌つ	阿和囙 (155)	△あはて (正230) あはつる (正230)	-
ワ	忙はしし	伊曾加和泗々 (167)	△いそかはし (正140)	-

2.4.2. 契沖仮名遣いとのみ不一致

次いで表 6 は契沖仮名遣いとのみ不一致がみられるものである。いずれも『仮名文字遣』には例がない。すなわち、『日本音義』には、契沖仮名遣いと一致せず定家仮名遣いとのみ一致する例はない。

「潮騒」「忙はし(し)」は歴史的仮名遣いでも「しほさゐ」「いそがはし(し)」である。「潮騒」について『日本音義』は「散伊者先也。伊幾音横通也。」としてゐる。「先つ頃」と同様に「先」の音便であると考えて「イ」としたもののか。

「水泡」「慌つ」は先述の「泡」「慌たし」と類似の事情であり、『日本音義』の方が歴史的仮名遣いと合致する。なお、「水泡」について契沖は「これは味のあはしきなり」(通628)としている。

2.4.3. 定家仮名遣いとのみ不一致

表 7 は定家仮名遣いとのみ不一致がみられるものである。これらは全て契沖仮名遣いなし歴史的仮名遣いと一致している。最初の 2 例は定家仮名遣いと全く一致しないもので、残りの 6 例は定家仮名遣いに揺れのあるものである。

2.4.4. その他

以上に述べた以外に、歴史的仮名遣いとの不一致としては、「奈良伊」(風の名・ならひ、a4)、「阿也宇泗」(危ふし、153)、「阿流比半」(或いは、156)、「伊毛韋」(齋、159)、「伊禰牟流」(居眠る、164)を指摘することができる。また、「阿久比」「阿久徒比」(151)が口語形容詞とすればこれも歴史的仮名遣いとの不一致であるが、「阿久比」は「阿久徒比中略也。俚語也。」とされ、「阿久徒比」は説明を欠いているので詳しくは分からない。なお、/オ/については、歴史的仮名遣いと一致しないのは先述の「伊散於泗」「伊徒遠泗幾」「加気呂保」のみである。

これらのうち、「或いは」は契沖仮名遣いでも「あるひは」(正163)であり、他は契沖の仮名遣い書には現れない。「或いは」は『仮名文字遣』でも「あるひは」としている。また、「齋」(いもひ)について、契沖は『和字正濫通妨抄』で、『倭字古今通例全書』に「今案ニ」として示された「ゐもゐ」を否定しているが、契沖自身の仮名遣いは示していない。『仮名文字遣』では「いもゐ」である。『日本音義』は「韋者居也。」(159)としており、「いもゐ」の「ゐ」は「ゐる」の「ゐ」

表7. 定家仮名遣いと不一致

音	語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
エ	植ゑ	宇恵 (b11)	うゑ (正212、通520、略724)	△うへをく (29)
ウ	植う	宇々 (b11)	うゝ (正236、通516、通520、略724) △ううる (正212)	△うふる (49)
イ	宵月	与比通幾 (b8)	よひつき (通470) △よひ (正158、略694) こよひ (通575)	△まつよひすきて (31) こよひ (33) よゐあかつき・よひ共 (40)
イ	頃ほひ	古呂保比 (b2)	ころほひ (正198) あくるところをひ (正198)	ころほひ (33) ころほい (42)
イ	今宵	古与比 (b2)	こよひ (通575) △よひ (正158・略694) よひつき (通470)	こよひ (33) △まつよひすきて (31) よゐあかつき・よひ共 (40)
イ	夜 ^{ヨヒ} (⁴)	与比 (a12)	よひ (正158、略694) △よひつき (通470) こよひ (通575)	まつよひすきて (31) △こよひ (33) よゐあかつき・よひ共 (40)
イ	宵	与比 (a13)	々	々
エ	甘える	阿末延流 (154)	-	あまえて (26) あまへて (31)

であると考えたようである。「危ふし」が「アヤウシ」となっているのは定家仮名遣いと一致する。契沖の仮名遣い書に「危ふし」は現れない。また、『日本音義』は「阿也者歩〔阿勇美〕之下略。(略) 宇泗者憂也。」(153)としており、「歩み+憂し」から来ているとしている。定家仮名遣いの慣習とこの語源説とにより、春満は「あやうし」の仮名遣いを採用したのでであろう。「居眠る」は契沖の仮名遣い書・『仮名文字遣』ともに現れない。『日本音義』では「伊者幾音横通。気也。」(164)とするが、同様の説明が直前の「寝ぬる」の項でも行われており、「寝ぬ」の「い」と同じものと考えたようである。歴史的仮名遣いで風の名の「ならひ」は「ならひ」とされるが、歴史的仮名遣いを確定できる古例はないものと思われる。『日本音義』では「伊息也。」(a4)と解しているが、その部分は抹消されている。

また、これらに加えて、『日本音義』では「伊半礼」の項で、「言事始也。伊者言〔伊不〕之下略也。半礼者始〔半之毎〕之中略。礼毎音横通也。」とした後、「一説曰、伊和礼〔並上声〕言義理也。伊者言〔伊不〕之下略也。和礼者分〔和加礼〕之中略也。」とも説いている。すなわち「謂れ」を「言ふ+始め」から来ていると考えれば「いはれ」であり、「言ふ+分かれ」から来ていると考えれば「いわれ」になるとしているのである。語源に基づいて仮名遣いを定めようとする、春満の態度を窺い知ることができる。

『日本音義』中、歴史的仮名遣いと異なる語は多いようではあるが、不可解な

誤りは少ないと言えよう。

2.5. 仮名遣いの変更された語

現存の『日本音義』は全て草稿段階のものであり、部分によってはおびただし
い修正の跡がある。その中には仮名遣いの変更された語が散見される。それをま
とめたのが表 8 である。表 8 を見ると、「慌つ」および契沖の仮名遣い書に例の
ない「南風」を除き、修正前は契沖仮名遣いと合致せず、修正後は合致してい
ることが分かる。「慌つ」は歴史的仮名遣いと合致した形に修正されている。「南風」
は古例がないので歴史的仮名遣いは不明であろう。

これは春満が仮名遣いを試行錯誤し、最終的に契沖仮名遣いや、時として歴史的
仮名遣いと同様の仮名遣いを採用したことを示していると言えよう。『日本音
義』の仮名遣いは契沖仮名遣いと似ているが、契沖の仮名遣い説を一方向的に鵜呑
みにしたものではないことが「泡」や「慌つ」のような例から分かる。契沖の仮
名遣い書が古書に徴証を求める実証的なものであるのに対して、確かに『日本音
義』の記述は「豎通」(同じ行の音が通うこと)「横通」(同じ段の音が通うこと)
といった概念を多用してほとんど出典は示されず、思弁的なきらいはあるもの
の、そこには独自色を見て取ることができる。この点、三宅清(1984)が「春
満の古仮名遣の説は契沖の模倣である。」(224丁オ)と端的に片づけていること
は必ずしも当を得ないであろう。

なお、表 8 には、仮名遣いに関わらないとみられる「句茂為→久毛韋」(121)

表 8. 『日本音義』で仮名遣いの変更された語

音	語	『日本音義』	契沖仮名遣い	定家仮名遣い
エ	細愛男	草々良恵乎徒古→草々 良延乎徒古 (b14)	さ、らえをとこ (正207)	-
ワ	野分	乃播幾→乃和幾 (a5)	のわきのかせ (正220)	のわき (43) の わきのかせ (43)
エ	南風	播辺乃加世→播延乃加 世 (a5)	-	-
ウ	八日	也不加→也字加 (a11)	やうか (正237)	-
イ	石灰	伊之半伊→伊之半比 (a35)	△はひ (正156、通412、略691)	△はひ (31)
ワ	革沓	加和久図→加半久図 (a56)	△かは (正225) かはころも (正 226) かはのおひ (正194) たか んなのうはかは (正227) たけ のかは (正227) ちからかは (正 225) つくりかは (正228) をし かは (正176・正225)	△をしかは (19) かは (44)
ワ	慌つ	阿半図→阿和図 (155)	△あはて (正230) あはつる (正 230)	-

のような例は除いてある。「美乎」「於之也奈」「加通良乎徒古」については、第2.3.4節で述べたとおりである。

3. 春満が契沖の学説を受容した時期

本節では、春満が契沖の仮名遣い説を受容した時期について考察する。

3.1. 先行説と問題の所在

国学の始祖とされる二人の人物、契沖と春満の学的関係については、近世以降長く議論の対象であった。この議論についての経緯は上田賢治（1981：2005、pp. 130-135）、松本久史（2005、pp. 22-26）によってまとめられているので、本節では詳細には立ち入らず、それらに基づいてその概要を述べることにする。

契沖と春満の説には、多くの類似が指摘されてきた。近世から明治時代にかけては、両者は無関係で学説の類似は暗合であるとする説が有力であった。この説は荷田在満『国歌八論』等で主張された。

また、春満が病褥の契沖から直接教えを受けたという説もあった。これは湯浅元禎げんていが『文会雑記』の中で主張したのがその始まりである。契沖と春満の学説の類似が暗合であるという説は他に山岡浚明まつあけ『類聚名物考』、伴蒿蹊『近世畸人伝』、平田篤胤『玉櫛』等にある。また、春満が契沖に直接教えを受けたという説は南山道人『日本諸家人物誌』等でも主張されている。しかし、契沖の晩年の元禄14（1701）年に春満は江戸にいたためこの説は成立しないことが、昭和に入って佐伯有義（1936）によって明らかにされた。

現在では、春満は直接契沖の教えを受けてはいないものの、その著作を通じて影響を受けたという見方が有力である。この見方は近代になって唱えられた。早くは岡本保孝が『難波江』（1878年）の中でこの種の考え方を述べている（上田1981：2005、p. 132）。大正時代に入って佐佐木信綱（1915）が春満自筆の『和字正濫要略』等の写本の存在を指摘し、久松潜一（1918：1958、1923：1958、1931、1976）によって万葉集研究における両者の説の類似が指摘され、この説が通説となった。三宅（1942、1984）、上田（1981：2005）、松本（2005）はいずれもこの立場であり、本稿もこれに従う。

松本（2005）は春満の著『日本書紀神代卷訓釈伝類語』の仮名遣いを契沖の仮名遣い書と比較してその類似を指摘している。しかし、『日本書紀神代卷訓釈伝類語』は成立年代が不明であるという憾みがあった。それに対して『日本音義』は成立時期が明確であり、次に述べるように春満が契沖の学説を受容してから遠くない時期に起筆されたと考えられるのである。

3.2. 春満が契沖の学説を受容したのは宝永5年である

春満が契沖の学説を受容した時期の下限を、宝永5年9月1日（1708年10月14日）に設けることができると考える。既に述べたように、『日本音義』の仮名遣

いには契沖の影響がみられ、「天部」の冒頭に「宝永五年戊子九月朔起筆」とあるからである。

春満が仮名遣いを改めた時期について、三宅 (1984、224丁オ) は「宝永正徳に入つて」とし、松本 (2016、p. 9) は「享保の初めごろ」かとしている。宝永5年9月1日という時期は三宅の説とほぼ一致するが、少し早めであり、かなり狭く限定されることになる。なお、三宅の推定は、宝永5年ごろに春満が定家仮名遣いに基づいている例があり、その後しばらく時期の確定できる資料がなかったことによるのであり、本稿の主張と齟齬するものではない。

上限については宝永5年2月13日 (1708年4月3日) に設けられると考えられる。松本 (2005、pp. 32-35) は、春満の『千首和歌』(宝永5年2月13日) に「すへ」(末)、「さえ」「さへ」(冴え)、「かほり」(香り)、「おしまぬ」(惜しまぬ)、「うへ」(植え)、「おり」(折り) といった歴史的仮名遣いと不一致を指摘している。このうち「かほり」以外は契沖仮名遣いとも一致しない。「冴え」「末」は定家仮名遣いでも「さえ」「すゑ」だが、「かほり」「おしまぬ」「うへ」「おり」は定家仮名遣いと合致する⁽⁵⁾。2月13日の時点では、春満はまだ契沖の仮名遣い説に触れていなかったか、触れていたとしても自身の表記法に取り入れるに至っていなかったことが分かる。結論として、春満が契沖の学説を受容したのは、宝永5年の2月13日から9月1日の間と考えられる。

したがって、春満が契沖の学説を受容した時期は『日本音義』の起筆からあまり遡らないと言えそうである。『日本音義』の編纂動機は契沖の学説を受容したことに関わるのかもしれない。『日本音義』を編んだ時期、春満は江戸に滞在していた (三宅1942、p. 48)。が、言語部字部の草稿を編み終わった翌年の正徳三 (1713) 年4月18日に帰京し、それ以降江戸と京都を行き来するようになる (三宅1942、p. 71)。そのあわただしさの中で、『日本音義』はついに完成を見なかったものであろうか。

4. おわりに

繰り返しになるが、以上に述べてきたことを以下にまとめる。

『日本音義』における万葉仮名の仮名遣いを調査した結果、契沖仮名遣いと定家仮名遣いの折衷というべき仮名遣いを用いていることが分かった。そして、『日本音義』は宝永5年9月1日に起筆されたものであるため、春満が契沖の学説を受容した時期の下限を、この日に設けることができる。

注

(1) 内容や筆跡の一致から『全集』(pp. 129-138) 所収の「語彙集衣服部」も『日本音義』の一部であろうと考えられる。「語彙集衣服部」の筆跡は、他の『日本音義』の春満自筆でない

部分と一致する。しかし、判型が一致しないことから関係が不明確であり、本稿では調査対象としないこととした。なお、「語彙集衣服部」には「閏八月廿三日」から「十一月十四日」の日付が書かれており、閏八月があることから宝永7（1710）年のものと思われる。

- (2) 『日本音義』中、四つ仮名が歴史的仮名遣いと異なるのは「宇須」（渦、a28）、「美知加与」（短夜、a10）、「伊洒良須」（弄らす、159）、「伊洒流」（弄る、160）、「伊洒氣流」（萎縮する、160）である。「渦」は契沖も「うす」（正273、通390、通452）としている。しかも『日本音義』では「宇通」を訂正して「宇須」にしているのであり、契沖の仮名遣い書によって訂したものである。「短し」は契沖は「みしかし」（正267、通635）とする。後の三者は契沖の仮名遣い書には見られない。
- (3) なお、筆者が『日本音義』において「於」「遠」「乎」の三者の書き分けがあることに気づいたのは、坂本論文（2008）を読んだことである。
- (4) 『日本音義』は「与比」を二つの項目に分けている。これは「ヨヒ」の語が古くは夜の初めごろのみでなく、より遅い時間まで指したことの反映であろう（『日本国語大辞典』（第二版）の「よい【宵】」の項参照）。
- (5) ただし『仮名文字遣』には「をしみたはふ」（50）「しをりするみち」（17）「つゝらをり」（17）等の例もあり、揺れがみられる。

参考文献

- 上田賢治（1981：2005）『国学の研究 草創期の人と業績』アーツアンドクラフツ
- 大野晋（1950：2006）「仮名遣の起源について」『語学と文学の間』岩波書店 pp. 233-291（初出：『国語と国文学』27-12）
- 官幣大社稲荷神社編（1929）『荷田全集 第壹巻』吉川弘文館
- 小松英雄（1974：1998）「藤原定家の文字づかい」『日本語書記史原論』笠間書院 pp. 131-164（初出：『言語生活』272）
- 佐伯有義（1936）『荷田春満大人の学徳と偉業』荷田春満大人二百年記念会
- 坂本清恵（2008）『『僻案抄』の仮名遣い——定家の「乎」について——』『論集』（4）アクセント史資料研究会 pp. 右17-35
- 佐佐木信綱（1915）『和歌史の研究』大日本学術協会
- 新編荷田春満全集編集委員会編（2009）『新編荷田春満全集 第11巻 語彙・アクセント資料』おうふう
- 築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳編集、久松潜一監修（1973）『契沖全集 第十巻 語学』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000-2002）『日本国語大辞典第二版』（全13巻および別巻）小学館
- 根岸茂夫研究代表（2007）『近世国学の展開と荷田春満の史料的研究』（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金 基盤研究（B）（2）研究成果報告書 課題番号15320086）国学院大学文学部
- 久松潜一（1918：1958）「万葉学に於ける契沖と真淵」『国文学への道』桜楓社 pp. 152-162（初出：『心の花』22-11）
- （1923：1958）「契沖と春満との関係に就いて」『国文学への道』桜楓社 pp. 163-168（初出：『心の花』27-3）
- （1931）「万葉集註釈書の研究」『校本万葉集 首巻・巻下』岩波書店 pp. 369-493
- （1976）『契沖伝』至文堂
- 福井久蔵編（1939）『国語学大系 仮名遣一』厚生閣

- 松本久史 (2005) 「荷田春満と契沖の学的関係——『日本書紀神代卷訓釈伝類語』を中心に——」
『荷田春満の国学と神道史』(久伊豆神社小教院叢書 2) 弘文堂 pp. 22-45
- (2016) 「平成二十六年年度皇学館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会
荷田春満と「荷田派」の国学者」『皇学館大学研究開発推進センター紀要』(2) 皇学館大
学研究開発推進センター pp. 1-13
- 三宅清 (1942) 『荷田春満』 畝傍書房
- (1984) 『荷田春満の古典学 第2巻』 私家版
- 諸星美智直 (2009) 「本卷所収 語彙・アクセント資料の書誌」『新編荷田春満全集 第11巻 語
彙・アクセント資料』 おうふう pp. 445-462

付記

本稿は国学院大学国語研究会令和5年度前期大会における口頭発表の内容を加筆・修正したものである。

本研究にあたって文書の調査をお許しいただいた東丸神社の松村準二宮司ご夫妻に深く感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費基盤研究 (B) 15H03242 「近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究」(研究代表者: 根岸茂夫) および、20H01189 「近世中期復古神道形成過程の史料的研究」(研究代表者: 松本久史) の助成を受けたものである。